

説経小考

——盲目開眼譚の意味——

土井順一

一

筆者は、かつて「説教者の蟬丸信仰とその芸能形態とに関する一考察」(『国文学論叢』第二〇輯、昭和五〇年三月)において、説経を語り歩いた説教者の特異な蟬丸信仰と、蟬丸の靈験性宣布をかねた彼らの複合芸能形態とについて考察した。そこで本稿では、そのような説教者が語った作品には、どのような特質があるのか、また、その特質は、彼らといかにかかわっているのか、という問題について少しく述べてみたいと思うのである。

『せつきやうさんせう太夫』や『せつきやうかるかや』など五説経といわれる説教者の古くからのレパートリーの中に、俊徳丸を題材とした作品がある。現存する最古の作品は『せつきやうしんとく丸』である。これは江戸時代初期の正保五年(一六四八)三月に刊行された佐渡七太夫の正本である。この正本について横山重氏は、寛永八年(一六三二)刊の『せつきやうかるかや』や説経与七郎の正本『さんせう太夫』と同様に、「説経の本来の面目を、最もよく保持してあるものと云ふことが出来よう。」⁽¹⁾といわれている。従って、この『せつきやうしんとく丸』をもとにして前述の問題について考えてみたいと思う。

俊徳丸を題材とする作品として他には謡曲の『弱法師』と『天王寺物狂』とが知られている。そこでこの謡曲と説経とを比較することによって説経の特質を明らかにしたいと思うが、その前にこれらの作品の源泉について先学の説があるるので紹介検討しておこう。

黒木勘蔵氏は、『太平記』(巻五)をあげ、更にその源流として『今昔物語集』巻第四第四話「拘拏羅太子扶眼依法力得眼語」を指摘された。²⁾この説を検討された和辻哲郎氏は、『今昔物語集』のクナーラ太子の物語は、俊徳丸伝説の源泉としては疑わしいこと、また、『太平記』も俊徳丸伝説に結び付くとは考えにくいことを述べ、そして、「結局、説経俊徳丸以前に俊徳丸を取り扱った作品として確かなものは、ただ謡曲『弱法師』だけだということになる。」と結論付けられた。³⁾

『今昔物語集』巻第四第四話が謡曲『弱法師』の典拠とはなり得ないことについては、夙に佐成謙太郎氏も指摘されていたのであるが、⁴⁾青江舜二郎氏は別の角度からそのクナーラ太子の物語が俊徳丸伝説の原話になることを述べていられるので検討しておこう。⁵⁾

青江氏は、俊徳丸という名前はインドの男という意味の身毒丸が次第に日本化して生じたものであること、また、高安という地名は『六度集経』などに漢訳された徳叉尸羅や咀叉尸羅が、原語のサンスクリットの Takasila (タクシヤシラー) やパーリ語の Takasila (タカシラー) という音に似ていることから、インドの物語が日本化される時にそこが選ばれたものであると指摘された。そして、『今昔物語集』巻第四第四話及びその出典である『六度集経』や『阿育王経』などの仏典に注目され、俊徳丸伝説はインドの法施あるいはクナーラ太子の物語が、日本で説経者によって語

られているうちに生成したものであろうと述べていられる。

青江氏は、「俊徳丸は古くはしんとく丸で身毒という文字があてられていた。」といわれている。俊徳丸という名前は謡曲にあり、しんとく丸は説経に見られるものであるが、しんとく丸の方が古い呼称だという証拠はない。また、しんとく丸には身毒という漢字があてられていたとされるが、説経ではしんとく丸という名前の由来を、

やかたにひき久しきおきなほまいり、此わかぎみに、御なおつけまいらせん、なにとつけんとありければ、のふよし此よしきこしめし、此こきよみづの申こなれば、いかやうにもはからへとある、おきなうけたまはり、ふくとくは、ち、こにあやかりたまへ、（はなやぶ）□みやうは、おきなにあやかり給へと、しんとくとくおかたどりて、御なおしんとく丸とたてまつる（圈点筆者）

と記してあり、このしんとく丸に漢字をあてるとすると、若月保治氏のように信徳丸（しん）が妥当である。身毒とあてることには無理があるのである。

次に高安という地名であるが、なるほどタカシラーの場合のタカは高安（たか）の高と似るが、シラーがどのように発音されるかと安（やす）に似るのか見当がつかない。従って、この点も存疑。

ところで、青江氏は俊徳丸伝説の源流を仏典にまで求められたのではあるが、それが直接の原拠になるとはされず、ワンクツションを置かれたところにポイントがある。すなわち、仏典などに載る法施やくナーラ太子の物語が説経者によつて語られているうちにそれが日本化して、そこから俊徳丸伝説が発生したと推測されたのである。外国種の話がそっくり日本の話として形象化されることは、例えば、浅井了意が『剪燈新話』を翻案して『伽婢子』を書いたことを考えるならば当然あり得るのであるから、青江氏の説には魅力がある。

さて、『今昔物語集』に載るクナーラ太子の物語は、岩本裕氏によると、（8）大概是『大唐西域記』により、その他『法苑珠

林』や『経律異相』などに載る所伝なども参照して成立したということである。そして、『今昔物語集』の撰者が、他の所伝を参照したにもかかわらず、その多くを『大唐西域記』の記事に依拠したために犯した失敗についても指摘されている。それは、この物語で最も重要なモチーフである眼とクナーラ太子の名前との関連性が消失してしまったことである。すなわち、太子の名前は、『阿育王経』によると、ヒマラヤにすむ鳩那羅鳥の眼のように美しい眼をしていたところから名付けられたと記されており、その点を欠落している『今昔物語集』では、後に何故太子が両眼を抉り取ることからなくなっているのである。

『今昔物語集』の撰者がクナーラ太子の物語を構成する際に採った処理方法を考慮すると、この物語が日本で伝承されて行つた過程は一樣ではなかつたであろうことが推測される。そして、そのことは『三国伝記』の記述によつてより一層確信されることになるのである。岩本氏は次のように述べていられる。

(略)『三国伝記』巻七の第四「俱那羅太子ノ事」を見ると、

阿育大王ト云(フ)王アリ。其ノ太子ニ俱那羅ト云(フ)太子(ハ)、利智ノ眼精蔽ニシテ、俱那羅鳥ノ眼ニ似タリ。故ニ其ノ名トス

と記され、また太子が王の命令を受けとつたときの太子の心情を美文調で述べ、「心ノ中コソ哀(レ)ナレ」と詠嘆している。また、阿育王が太子と再会したのは「或ル時、父阿育王、狩リニ出タマヒケル時」としているが、これは『阿育王経』その他にも見られない叙述で、撰者玄棟の創作といふべきである。⁹⁾

『三国伝記』には『今昔物語集』が欠落させていたクナーラ太子の名前の由来を記しているので注目されるが、それ以上に興味深いのは、撰者玄棟の創作による記述があると指摘されている点である。というのは、クナーラ太子の物語は伝典の所伝のままではなく、適当にアレンジされていたことが事実としてあつたことになり、そのことは更に、ク

ナラ太子の物語が説経者によって語られているうちに日本化して俊徳丸伝説が生成したのではないかとされる青江氏の説を補強する傍証の一つにもなるかと思われるからである。

青江氏が提起された説は、説話研究者にとつて興味深い問題であることは疑いない。しかしながら、筆者は次に掲げる資料によつて現時点では青江氏の説は首肯しかねることを記さねばならない。

クナラ太子の物語は、青江氏が推定されたように説経者によつて語られることがあつたであろう。ところがそれは、あくまでもクナラ太子のこととして語られていたのではなからうか。クナラ太子は、『今昔物語集』以後、右に掲出した『三國伝記』や、『宝物集』にも記載されており、盲僧達によつても伝承されていたようである。⁽¹⁰⁾更に、世阿弥作の謡曲『逢坂物狂』の一節には次のように記されている。

(略)一セイシテ子へいつか世に。逢坂山のさねかづら。くる人しらぬ。心かな二句子へ関の此方に年はふれ共。二人へ身にも留らぬ。月日かな(シテ)サシへ譬へを申せば恐れなれ共。天然二には拘浪拏太子。二人へ又我朝の蟬丸。皆是王子の御身なれども。因果の車の廻り来て。盲亀の雲もはれやらぬ。月の夜雪の朝日影。何れも疎き御心の闇路の果は痛はしや。(略)

世阿弥は『弱法師』の作者親世十郎元雅の父親であり、しかも『弱法師』のクセの部分を書いたといわれている。その世阿弥が、王子の身で盲目となつた者はインドではクナラ太子であると記しているのである。これは、クナラ太子の物語はあまりにも有名であり、『弱法師』が書かれた頃においても、それが日本の話として生成するには至らなかつたことを示しているのではないか、と思われる。従つて、前述した通り、青江氏の説には賛同しかねるのである。そこで、以下の説経と謡曲との比較には、クナラ太子の物語は一応除外することにする。

『弱法師』や『せつきやうしんとく丸』は、その原話がクナラ太子の物語にまでは溯らないが、共に同根の題材から形象化されていることは考えられる。この点について室木弥太郎氏は、説経『しんとく丸』の形成過程を「謡曲『弱法師』（観世元雅作）と同材であるが、謡曲によつたのではあるまい。四天王寺の弱法師というこじき夫婦と河内高安長者が絡まる物語があつて、謡曲も説経もそれによつたのであろう。」⁽¹²⁾と述べていられる。この謡曲と説経との関係であるが、黒木勘藏氏は、『せつきやうしんとく丸』の先行作品を『弱法師』と考えられ、若月保治氏は、『弱法師』の次に『天王寺物狂』を置かれているので、古くは謡曲から説経が成立したものと把握されていたようである。確かに『天王寺物狂』と『せつきやうしんとく丸』とは非常に似通つた点があり、両者の影響関係を明らかにすることは重要な課題ではあるが、筆者は、室木氏の説に従い、ここでは謡曲作者と説教者が、同根の題材をそれぞれのように形象化しているのかについて検討し、その上で説経の特質を明らかにしてみたいと思うのである。

まず謡曲『弱法師』について考えてみよう。梗概は次の通りである。

河内国高安の里の左衛門尉通俊は、ある人の讒言を信じ一子俊徳丸を追放したが、あまりに不憫に思い、天王寺で七日間の施行をする。そこへ悲しみのあまり盲目となり、弱法師と渾名されている俊徳丸が来て曲舞を謡う。

通俊はこの弱法師が我が子であることに気付くが、人目を憚り夜になって高安へ連れて帰ろうと思ひ、まず日想観を拝ませる。やがて夜も更けたので名乗り合ひ、高安に帰つて行く。⁽¹⁶⁾

『弱法師』には正長二年（一四二九）の世阿弥自筆本の模写本『ヨロホシノ本』が現存するが、⁽¹⁷⁾それには現行曲には見られない俊徳丸の妻が登場すること、また、通俊が、追放した俊徳丸を不憫に思い天王寺で施行を行うという部分と、

施行を受けに来た弱法師が自分の子供であると察知する件が見られないという相違がある。

また、世阿弥自筆本と現行曲との中間に位置する詞章を持つ『天靈星』も紹介されている。⁽¹⁸⁾この本には、『ヨロホシノ本』と同様に、通利が追放した子供を不憫に思つて天王寺で施行を行うという部分はない。しかし、施行を受けに来た弱法師を俊徳丸と察知するところはある。

さて、和辻哲郎氏は、『弱法師』は、『聖徳太子』に關係のある天王寺の救世観音の信仰や、日想観の形で現わされている浄土信仰を中心として、盲目の弱法師の心眼に映る光明の世界を描き出そうとしているのである。⁽¹⁹⁾と述べていられる。和辻氏のいわれるように『弱法師』には天王寺を舞台とする浄土信仰が描写されているが、前述の三本を比較してみると微妙な変質に気付かれる。すなわち、『ヨロホシノ本』では天王寺の僧と俊徳丸夫婦との対話が中心となつてゐるが、現行曲では俊徳丸と父の通俊とで劇が進行しているので、主題が天王寺を舞台とする浄土信仰から親子の愛情へと微妙に移行していることが窺われるのである。いずれにしても、この謡曲の中心は、和辻氏が述べられたように、『弱法師の天王寺礼讃や日想観にあるのであつて、盲目の治癒とか父子の仲なおりとかにあるのではない。⁽²⁰⁾』のであろう。

次に『天王寺物狂』を見てみよう。

清水寺観音の申し子俊徳丸は、母を亡くし盲目となつた上に、継母の讒言によつて天王寺に捨てられ悲嘆にくれてゐる。郎等の仲光は、連日高安から慰めに行くが、今日は折りしも形見の文を読み面白く狂う狂女に出会い、その狂乱の謂れを尋ねたところ――。

クリ地「さる程に、過ぎにし二月の末かとよ。聖靈会と名づけ、此宝前にして稚児の舞の有りし時、信俊といひし人の一子、此役を勤む。シテサシ「されば此人は、容顔殊更麗しく、地「秘曲感応の人なれば、黄鐘調にも叶ふべし

と、誠に天人も飛来し、龍神も浮ぶ粧なり。シテ「げにや古より、地」色には迷ひ安く、又はえならぬ匂ひには、心ときめく習ひかや。折しも松の風落ちて、御簾吹き上げし隙よりも、互に見えし面影の、是ぞ恋慕の始めなる。まだ知らぬ、人を見そめて恋衣、ひとへに恋ふる心より、海人の藻塩火たきそめて、煙も空に迷ふらし……

俊徳丸は、この狂女が和泉の恋人であることに気付き、名乗り合つて再会を喜ぶのである。

この『天王寺物狂』は、天王寺の聖霊会で稚児舞を舞つた俊徳丸を見初めた女が、狂女となつて俊徳丸を捜していたが、天王寺で偶然再会するというストーリーで、男女の愛情が主題となつている。そして、更に重要なことは、ここには元雅が『弱法師』で描いた浄土信仰は全く継承されていないことである。

さて、最後に説経の梗概を掲出する。

佐渡七太夫正本『せつきやうしんとく丸』は、下巻の末尾が欠丁になつているので、その部分は天和貞享頃（一六八一〜八七）に出版されたと推定されている江戸版の『しんとく丸』(七太夫正本、うろこかたや孫兵衛刊)によつて補い、「」を付しておく。

河内国高安の郡の長者、のぶよし夫婦は、子供に恵まれないので京都清水寺の観音に申子をする。夫婦は、観音から前生の悪因によつて子種が無いことを知らされるが、それでも祈誓をやめず、ついに子種を授かる。しかし、その子が七歳になると夫婦のどちらかの生命に危険が起ころうと云ふことであつた。やがて誕生した子供は、しんとく丸と名付けられる。九歳になるとしぎの寺へ預けられ、そこで抜群の秀才振りを発揮するが、天王寺の聖霊会で稚児舞を舞うために呼びもどされる。しんとく丸は、舞の途中で和泉国のかげ山長者の娘、おと姫を見初めて恋煩いとなる。それを察した郎等仲光が、恋を仲介せんとして薬商人に変装し、かげ山長者の館へ潜入し、女房達にしんとく丸の手紙を渡す。(上)

騒ぎ声につられたおと姫は、大和言葉の手紙を女房達に読んでやり、それがしんとく丸からの恋文であることを知り驚いて破り捨てる。が父の言葉によつて返書を認めて仲光に渡す。高安に帰つた仲光がことの次第を長者夫婦に言上すると、御台は喜びのあまり、しんとく丸が一三歳になつたのに自分達にはまだ生命に異常がない、清水寺の観音でさえ嘘をいわれるのだから人間も嘘をついて世渡りをするように、とつい誹謗してしまう。怒つた観音は、みさきに命じて御台を殺させる。その後のぶよしは、六条殿の娘を後妻に娶る。後妻はやがて生まれたおとの二郎を総領にせんとして、清水寺の観音にしんとく丸を殺すか違例にするようにと祈誓し、都の神社に一三六本の呪い釘を打つて回る。しんとく丸は、継母の呪咀により違例になり、その上盲目となつたので、天王寺に捨てられる。(中)

しんとく丸は、清水寺観音の御告により天王寺七村で乞食をした後、病治療のため熊野へ赴く。その途中で、旅の修行者に変身した観音に、有徳人の施行を受けるようにと教えられ、かげ山長者の館とも知らずに行つたところ、顔を見知る者があつて非常な恥辱を受ける。そこで、すぐに天王寺へひき返し、飢え死にをしようと決意する。おと姫は、しんとく丸が訪れたことを知り、父母を説得して捜しに出かけ、天王寺で再会する。そして、しんとく丸の病を治すために清水寺に参詣し祈誓する。やがて観音の御告があつて、下付された烏帚で撫でると病は本復する。しんとく丸は、盲目の時人々に恩を受けたので報謝として施行を行う。そこへ落ちぶれて盲目となつた父親が継母とおとの二郎を伴いやつて来る。「しんとく丸は、父親の目を烏帚で撫でて治し、継母とおとの二郎を殺させ、河内に帰り母親の菩提を弔う。」(下)

右の梗概から知られるように『せつきやうしんとく丸』は、清水寺観音の靈驗譚として構想され、因果応報が主題とされている。これは、『弱法師』や『天王寺物狂』には描かれなかつたもので、ここに謡曲作者と説教者との意図する

ところの相違が、それぞれの芸態の違いはあるものの、明白となったのである。
 謡曲と説経との相違を更に詳しく見るために、『せつきやうしんとく丸』の構成要素を基にした対照表を掲出してみよう。○は一致、△は類似、×はなしを示す。

	『せつきやうしんとく丸』	『弱法師』	『天王寺物狂』
一	申子譚	×	○
二	長者夫婦前生譚	×	×
三	天王寺舞樂譚	△	○
四	しんとく丸恋愛譚	×	△
五	御台死亡譚	×	○
六	継子苛責譚	△	○
七	しんとく丸違例譚	△	△
八	しんとく丸流浪譚	△	△
九	観音靈験譚	×	×
一〇	しんとく丸捜索譚	×	○
一一	違例本復(盲目開眼)譚	×	×
一二	父子再会譚	○	△

謡曲には採り上げられなくて説経のみに形象化された要素は、右の対照表の通り、

二、長者夫婦前生譚

九、観音靈験譚

一一、違例本復（盲目開眼）譚

の三点である。これらが『せつきやうしんとく丸』の特質になると考えられるが、いましばらく検討してみたい。

四

『せつきやうしんとく丸』の構成要素のうち、長者夫婦前生譚、観音靈験譚、違例本復（盲目開眼）譚は、謡曲作者達が採り上げなかったものであるが、それらは説教者が独自に創唱したものであろうか。この点について以下考えてみよう。

夫婦に子供がなくて神仏に祈誓するという所謂申子譚については、簡単には御伽草子の『一寸法師』や『梵天国』などが想い出されるように、説経以外の作品にもしばしば見られるモチーフである。『梵天国』では、『せつきやうしんとく丸』のぶよし長者夫婦と同様に、五条右大臣高藤が清水寺に申子をして子種を授けられている。ところが、高藤には子種がない理由としての前生譚はない。とすると、前生譚は説経が所有する独自のモチーフかと考えられそうである。しかし、それは『神道集』巻六の「三嶋大明神事」にもあるのである。従って、説経に描かれる前生譚は説経独自のものとはいえないのである。

次に、観音の靈験譚であるが、『せつきやうしんとく丸』には清水寺の観音がのぶよし長者夫婦に子種を授けるとい

う靈験を初めとして、苦境にあるしんとく丸を救済することが描写されている。このような神仏の靈験譚は、古浄瑠璃の『はなや』、『あかし』、『月界長者』などを初め多くの作品に見られる。また、はるかに溯って『日本靈異記』には観音の靈験譚は随所にあり、その外寺社の由来を記す縁起なども本体である神仏の靈験性を説くものが多い。これも説経独自のモチーフとは考えられないことは、前生譚と同様である。

第三の違例本復（盲目開眼）譚は、観音靈験譚の一つなのではあるが、『せつきやうしんとく丸』では重要な要素の一つと考えられるので別項目としたのである。さて、しんとく丸の違例が治癒したり盲目が開眼するというモチーフは、『弱法師』や『天王寺物狂』にはなかった。謡曲で盲人を扱った他の作品に『蟬丸』や『景清』があるが、これらも蟬丸及び景清の盲目が開眼するというモチーフはない。とすると、このモチーフは説教者のみが創案したものであるうか。

盲目が開眼するというモチーフを持つ盲目開眼譚は実は古くからある。例を掲げると、『日本靈異記』下巻に、「二目盲女人婦敬薬師仏木像以現得明眼縁第一」、「二目盲男敬称千手観音摩尼手以現得明眼縁第二」、「沙門一目眼盲使読金剛般若経得明眼縁第二」などの説話が載っている。また、『今昔物語集』卷一三には、上記の説話以外に、「信濃国盲僧誦法花開両眼語第一八」や「筑前国女誦法花開盲語第二六」などがある。このように盲目開眼説話を掲出するならば枚挙に遑がないのであるが、更に説経と同時代頃の作品を看ても、『さよひめのさうし』や『びじよごせん』にそれがある。従って、盲目開眼のモチーフも説経独自のものとはいえないことが知られるのであるが、『せつきやうしんとく丸』では、しんとく丸の違例や盲目が本復するのは清水寺観音の利益によるのであるから、その点は看過できない。つまり、『せつきやうしんとく丸』に形象化されている清水寺観音の靈験性は、

説教者による創造なのか否か、という検討が必要になってくるのである。

清水寺観音の靈驗譚を載す『清水靈驗記』⁽²³⁾に、次の説話が記されている。

平内左衛門入道の僕従の青女は、母親看病の疲労のため病氣になるが、日ごろ熱心に信仰していた清水寺観音の御利益で回復する。

これによって清水寺観音に病を本復させる御利益があることが知られるが、盲目を開眼させることは記されていないのである。

ところで、舞曲『景清付籠破』に、頼朝を見ないために両眼を刳貫いた景清の眼が、清水寺観音の力で平癒することが載っている。

(略)景清承りて。あら有難や候。命を助給ふのみならず。あまつさゝ御恩をそへてたぶ君は。世にもありつべしとも存せず候去なから。君を見申さん度毎に。あれこそ主君の敵ぞと。あつはれ一ト刀うらみ申さでと。思ふ所存は露ちりほともうせ候まし。夫恩の見て恩を知らざるは。植木の鳥のおのが住。枝をからすに事ならずと。

父ふ殿の御さしそへをこひ取て。両眼のくり出し。うすおしきにならべ。頼朝の御目に懸奉る。……(略)……斯て景清。はだの守りに納て。御前を罷立又。清水へ参り。三百三十三卷の。くわんおん経をどくじゆして。三千三百三拾三度の。礼拝を奉る。有難や観音者。三十三身に身をへんし。十九説法御のりをのべ。衆生のぐわんのみて給ふと。今こそ思ひしられたれ。内陳よりこんじきの。光りさひて。景清がかうべを。半時計り照し給へば。取てなかりし両眼が。たちまち出来て。本の如く見へにけり。⁽²⁴⁾

この『景清付籠破』の記述によって、説經に記されている清水寺観音の違例本復(盲目開眼)譚も説教者が独自に創案したモチーフではないであろうことが推測されるのである。

五

長者夫婦前生譚、観音靈験譚、違例本復（盲目開眼）譚は説教者が独自に創作したものではないことが知られたが、しかし、そのことをもって説経には何の特質もないというようには結論付けられないと思われる。というのは、それらの要素が、他の説経にはどのように形象化されているのか把握した上で判断しなければならぬと考えるからである。

『せつきやうしんとく丸』以外の説経で前生譚を収載する作品に江戸版『まつら長者』がある。近江国竹生島の弁才天の本地譚であるこの作品は、大和国の壺坂の松浦長者夫婦が長谷寺の観音に祈誓した時に、子種のない理由として前生譚が語られている⁽²⁵⁾。ところが、この作品の寛文元年（一六六一）版には前生譚は欠落している。このことから考えると、説教者は語る時の状況に応じて適当に省略することがあったようである。とすると、『をぐり』に鞍馬寺の毘沙門天に祈誓する申子譚があつて前生譚がないことや、また、『あいこの若』に長谷寺の観音に祈誓する申子譚があるものの、二条蔵人清平夫婦の前生譚がないことなども、あるいは共に前生譚が語られる場合があつたのではないかと推測されるのである。いずれにしても、前生譚は申子譚と対をなすものであるので、説経の重要な要素であることが窺われる。

神仏の靈験譚については、『せつきやうさんせう太夫』、『熊野之御本地』、『石山記』などに見られる。また、その靈験譚の一つでもある盲目開眼譚は、『せつきやうさんせう太夫』や『まつら長者』にも見られる。ここでは『せつきやうさんせう太夫』の開眼譚を掲出してみよう。この作品は、『せつきやうしんとく丸』と同じ佐渡七太夫の正本で、明暦二年（一六五六）に刊行されたものである。

フシさてその、ち、ゑぞゑ御さ有て、は、この行へをおたつねあれは、あわの鳥をおふておはします、つし王殿は御らんじて、なふいかには、うへさま、つし王丸にて御ざ有が、よに出てこれまで参たり、は、此由聞召、あふその事にて御さ有よ、みつからは、あねにあんしゆ、弟つし王丸とて、こをは兄弟もちたるか、これよりをくかたへうられて御さない、さやうにめもみへぬ物は、たらさぬ物よ、めくらのうつ、ゑには、とかもないと、あたりをはらふておはします、つし王殿は聞召、げにもだうりやとて、はだのまぶりの、ぢさうほさつを取いたし、は、この両かんにおあてあれは、両がんかはつしとあいで、す、をはつたることく也⁽²⁶⁾。

右は、つし王丸が人買いにさらわれて別れ別れになつた母親と再会した場面である。盲目となつた母親の目を開眼させるのは、つし王丸が姉の安寿からもらった守り本尊の地藏菩薩であつた。

ところで、『せつきやうさんせう太夫』は、

た、いまかたり申御物かたり、国を申さは、たんこの国、かなやきぢさうの御本ぢを、あら／＼ときたてひろめ申に、これも一たひは人げんにておはします⁽²⁷⁾。

というように丹後国金焼地藏の本地譚として語り始められている。ところが、佐渡七太夫豊孝の正本『山庄太輔』（正徳三年版）では次のようになってゐる。

扱もその、ち。債世間を鑑^{かみかみ}に。おごる者久しからず。じやけんはういつなる者は。つゐにはほろぶ、極ておとろへたる者は。一度はさかふ。爰に丹後の国、由良の湊といふ所に。さんせうたゆふひろむねとて。長者のながれすみ給ふ⁽²⁸⁾。

ここに明らかなように、『山庄太輔』では、『せつきやうさんせう太夫』に描かれた本地譚が完全に消失しているのである。そしてここでは、母親の眼を開眼させるのは、もはや地藏菩薩ではなく、系図になつてゐるのである。

爰にあわれをとめしは。つしわう丸の母上にて、しよしのあわれをと、めたり。なるこのなわにとりついて。あけては、あんしゆ恋しやな。くれては、つしわう恋し。おわすと、たてや此鳥と、泪と。ともにおい給ふ。わかきみ此よし御らんして。するくとはしりより。母上さまにすかりつき。こわあさしまし（あましましのか）の御風情。つしわう参りて候と。泪にくれておわします。母上はきこしめし。今は心も狂らんし。そのき給へ、ぢ下人と。つへふりあけて、払ひうちのうち給ふ。いたはしやわか君は。うたる、つゑにすがりつき。げに御とより、ことわりなり。是は御目の見ゑぬゆへなりとて。けいずのまきもの取いたし。母上の両がんを。三とまでさせ給へば。しいて久しき両かん、たちまちにおがまる、。おやこたかいに、とりついて。是はく（あ）とばかりなり。

母親の眼を開眼させるのが、地藏菩薩から系図に変わっているのは、山本九兵衛が出版した寛文七年（一六六七）版も同様である。このことは説教者が次第に宗教性を喪失して行ったことを物語るものであるが、一方では、そうした変質しつつあった説経の中にあっても、依然として盲目開眼譚のみはしっかりと保持していることに驚きを感じるのである。このことから、説経に語られている靈験譚、就中盲目開眼譚は、説教者の意識下に重要な位置を占めていることは疑いないことである。

以上検討して来たことから、『せつきやうしんとく丸』に見られた長者夫婦前生譚、観音靈験譚、違例本復（盲目開眼）譚は、それぞれ他の説経にも描かれていることから、それらを説経を説経たらしめる特質であると考えてよいものと思われる。

前生譚は前述した通り申子譚に関連する要素であり、それらは靈験譚の一部でもあるのである。また、違例本復（盲目開眼）譚も靈験譚の一部であった。説教者は、神仏の靈験譚、とりわけ盲目開眼譚を語るころにその中心を置いたものと思われる。

では、彼らは何故そのようなものを語ったのであろうか。それは、既に明らかにしておいたように、彼らの蟬丸信仰と密接に関連しているのである。すなわち、説教者は、蟬丸を妙音菩薩の化身と考え、更に、盲目の蟬丸が開眼したという特異な伝承を持っていたので、彼らのレパートリーの中にも開眼譚を加えたものと思われる。

ところで、説教者は、蟬丸を題材とする作品は元来持っていなかったようである。現存する説経では江戸版『まつら長者』の四段目に蟬丸のことが少し語られている程度である。⁽³¹⁾従って、文政二年(一八一九)四月に、中山雛松の名代の説教讃語座が「蟬磨呂」を上演した⁽³²⁾のは、むしろ特異な例であろう。説教者にとって蟬丸はあくまでも信仰する神であったのであるから、作品として語ることをはばかり、それに代わるものとして盲目開眼譚を語り、蟬丸の靈驗性を喧伝したものと思われる。

注

- (1) 『説経正本集』第一、四四九ページ。
- (2) 『浄瑠璃史』七〇ページ。
- (3) 『歌舞伎と操り浄瑠璃』(和辻哲郎全集)第一六卷所収)三〇六―三二二ページ。
- (4) 『謡曲大観』「弱法師」参看。
- (5) 『日本芸能の源流』(民俗民芸双書六一)「しんとく丸」参看。
- (6) 『せつきやうしんとく丸』(『説経正本集』第一所収)九九ページ。
- (7) 『古浄瑠璃の研究』第一卷、三三七ページ。
- (8) 『仏教説話』「クナラ太子の寛容」参看。
- (9) 同右、八九―九〇ページ。

- (10) 『続日本盲人史』二六六ページ参看。クナラ太子の物語は、上記以外にも『厭穢欣浄抄』、『法華経直談鈔』、『因縁抄』などに収載されていることが報告されている(阿部泰郎氏『因縁抄』(古典文庫)。なお、『因縁抄』所収の話は明らかに説経者によって語られた形跡がある)。
- (11) 『未刊謡曲集』一(古典文庫)九一〜九二ページ。
- (12) 『説経集』(新潮日本古典集成)四一九ページ。
- (13) 前掲書、七〇ページ。
- (14) 前掲書、三二九ページ。
- (15) 若月氏は『天王寺物狂』を先行作とされたが、筆者はその逆の可能性もあって考えている。というのは、『せつきやうしんとく丸』では継母を六条殿の娘と記すが、寛文元年の山本九兵衛版『しんとく丸』、江戸版『しんとく丸』などは八条殿の娘としている。『天王寺物狂』も継母を八条殿の娘と記してあるので、この作品は、山本版『しんとく丸』などに依拠した可能性があるのである。
- (16) 『謡曲大観』所収本による。
- (17) 川瀬一馬氏著『世阿弥自筆伝書集』所収。
- (18) 在寺枚平氏『弱法師の異本』(『宝生』第一二卷三号、昭和三八年三月)。
- (19) 前掲書、三二一ページ。
- (20) 同右、三二二ページ。
- (21) 『校註謡曲叢書』第二卷、六六二ページ。
- (22) 『説経正本集』第一所収。
- (23) 『統群書類従』第二六輯下所収。
- (24) 笹野堅氏編『幸若舞曲集』(本文)二四四〜二四五ページ。
- (25) 『説経正本集』第一、一八一〜一八二ページ。
- (26) 同右、四四ページ。

- (27) 同右、二九ページ。
(28) 同右、七〇ページ。
(29) 同右、九一ページ。
(30) 拙稿、「説教者の蟬丸信仰とその芸能形態とに関する一考察」(『国文学論叢』第二〇輯)。
(31) 『説経正本集』第一、一八八―一八九ページ。
(32) 『撰陽奇観』卷之四十六(『浪速叢書』第六、二二六―三〇ページ)。
付記 本稿の骨子は、「弱法師の変質」と題して第九回芸能史研究会大会(昭和四七年五月二七日)で発表したものである。